

書 評

松崎憲三編著

『東アジアの死霊結婚』

大山 孝正\*

本書は、日本の東北地方の死霊結婚について調査・研究を進める編著者が、沖縄を含む日本・韓国・中国・香港・台湾の東アジア諸地域における、これまで発表された死霊結婚に関する16本の論稿をまとめ、これに2本の新稿を加えて、編集・発刊されたものである。両親や近親者が死者をして結婚せしむる習俗については、「死霊結婚」「冥婚」「冥界婚」「死後結婚」など、研究者によって様々なタームが用いられてきたが、近年「死霊結婚」に統一する動きがあり、本書でも「死霊結婚」の語をタイトルとして用いている。

本書の構成は、「第一篇 日本の死霊結婚」、「第二篇 東アジアの死霊結婚」、「第三篇 説話に見る死霊結婚」の三篇に分かれる。各篇に収められた論稿を紹介しておく、以下の通りである（所出は省略）。

第一篇 日本の死霊結婚

高松敬吉「青森県の冥婚」

松崎憲三「東北地方の冥婚についての一考察  
（一）山形県村山地方を中心として一」

松崎憲三「東北地方の冥婚についての一考察  
（二）宮城県の記事を中心として一」

松崎憲三「東北地方の冥婚についての一考察  
（三）青森県弘前市・山形県羽黒町の事例を中心として一」（新稿）

櫻井徳太郎「沖縄本島の冥界婚姻巫俗—ユタの関与するグソー・ヌ・ニーピチ—」

新垣智子「沖縄における冥婚—グソー・ヌ・ニーピチ—の構造的原理」（新稿）

\*筑波大学大学院歴史・人類学研究科

第二篇 東アジアの死霊結婚

竹田 旦「東アジアの死霊結婚—韓国の習俗を中心に—」

竹田 旦「韓国・珍島における死霊結婚」

崔 吉城「韓国巫俗の死霊祭」

中田睦子「冥婚から陰陽合婚へ—台湾における冥婚類型の変化とその意味—」

植野弘子「台湾漢人社会の位牌婚とその変化—父系イデオロギーと姻戚関係のジレンマ—」

中生勝美「香港の冥婚と世界観」

櫻井徳太郎「冥界婚姻の論理—中国の冥婚習俗と死霊観—」

廣田律子「文献に見出せる冥婚習俗とその意味」

第三篇 説話に見る死霊結婚

繁原 央「中国冥婚説話の二つの型」

澤田瑞穂「墓中育児譚」

花部英雄「幽婚出産譚」

花部英雄「幽婚譚の系譜—通幻伝説を中心に—」

本書のように日本および隣接諸地域についての論稿を集めて、地域ごとに整理した書物としては、既に比嘉政夫・植松明石・渡辺欣雄編『環中国海の民俗と文化』1～3（凱風社、1989）等が出ている。こうした形の編著の出版は、日本と東アジア諸地域との比較民俗学が指向されながらも、その独自の視点や方法論については現在も様々な意見の相違がある中で、各地域での研究成果を一端整理することによって、比較民俗学の内容および方向性を具体的に議論していくための共通の場所を提示するものとして、大きな意義を持つと考えられる。本書の発刊も、死霊結婚をめぐる比較民俗学の研究の進展に寄与するものとして評価されよう。

しかし、編著者である松崎氏自身は「はじめに」の中で、「筆者の関心は、死霊結婚の日本における地域的展開とその特性を把握することにあるが、さまざまな成果を繙くに連れて、東アジア諸地域における習俗を視野に入れた上で、日本の死霊結婚を見つめ直す必要を痛感するに至った。そ

の手始めに試みたのが先学諸子の論考の整理であり、その副産物が本書にはかならない」と述べている。すなわち、編著者の立場としては、本書はあくまで死霊結婚に関する研究史の整理を目的に編まれたのであり、「別段、比較民俗学的視点から編まれたものではない」という。事実、本書の中で松崎氏が「死霊結婚の比較民俗学」のあり方について具体的に論及している箇所はほとんど見られない。唯一、第二篇に収められた竹田且「東アジアの死霊結婚—韓国事例を中心に—」が、中国・日本・韓国の死霊結婚の比較分析を通して、死霊結婚の類型化を試みているのみである。

死霊結婚の比較民俗学的研究を進めることについて、松崎氏は、むしろ慎重な姿勢を示している。本書中に収められた氏自身の論稿（「東北地方の冥婚についての一考察（一）」）の中で、氏はこれまでの死霊結婚をめぐる研究史を簡潔に整理している。それによると、戦前の中国本土を対象とした研究以来、日本では永く研究が途絶えていたが、1970年代後半以降、櫻井徳太郎によって比較民俗学的視点からの中国、日本の東北地方、沖縄をフィールドとした研究論文が発表された。さらに80年代に入って、韓国をフィールドとした調査も行われ、櫻井、竹田且らによって東アジア全体を視野に入れた研究がなされた。その一方で、同氏の指摘するように、日本、特に東北地方の死霊結婚についてのインテンシブな調査は、これまであまり行われてこなかった。

こうした研究史を踏まえた上で、松崎氏は同論稿の中で、「日本の、特に東北地方の冥婚习俗の実態が充分な形で把握されていない現状での比較は少なからず問題が残る」と述べている。例えば、竹田が示した東アジアの死霊結婚の類型についても、再検討の余地があるとしている。具体的には、人形や地蔵を奉納する青森の事例や、「ムカサリ絵馬」を奉納する山形の事例などについても、竹田の類型と対照させつつ検討し、竹田が整理した結果よりヴァリエーションを持つものとして捉えられるとしている。この論稿で示された同氏の姿勢は、主に中国・韓国などを対象とした調査・研

究の進展の中でなされてきた、これまでの比較民俗学的研究に対して、日本における詳細な調査・研究をさらに進展させる必要を説くものである。そうした姿勢は、本書の編著者としての姿勢にも表れている。

しかし、「東アジア諸地域における習俗を視野に入れ」ることの必要性を感じたことを編集の動機として挙げているように、氏自身が比較民俗学的研究への指向性を有していたことも確かである。その意味では、本書に収められた既出の論稿を通して、今後の比較民俗学的研究をめぐる課題を浮き彫りにすることが、編著者としての同氏のねらいであったとも考えられる。また、日本の死霊結婚习俗の発生と普及過程を知る大きな手掛かりとして、氏が中国から受容された冥婚説話に注目し、冥婚説話についての論稿を第三篇「説話に見る死霊結婚」にまとめていることは、今後の比較研究において重要な意味を持つものであろう。

ただ、氏自身は今後の比較研究のヴィジョンについて、具体的な論及はほとんどしていない。むしろ、その前段階の作業としての個々の地域における詳細な調査・研究の方に、より比重を置いているようである。例えば、「はじめに」の中で「筆者の関心は、死霊結婚の日本における地域的展開とその特性を把握することにある」と述べ、巻末の「解説」にも「編者が当面の課題としている死霊結婚の地域的展開とその特性の把握」とある。同氏がこのように述べる理由は、先に触れたように、当面は日本における詳細な調査・研究を進展させる必要があるとの氏自身の考えもあるが、一方で「死霊結婚は個別地域毎に異なる展開を見せ、また個別地域毎にその持つ意味も異なる」という認識があるからである。こうした個々の地域レベルでの死霊結婚の特性把握という作業は、基本的には、氏自身のフィールドである東北地方の死霊結婚についての調査・研究においてなされるべき性格のものであろう。本書中に収められた自らの3本の論稿の中でも、東北地方各地の死霊結婚の目的や奉納されるもの、介在する民間巫者の種類、新宗教の関わり方などについて詳細に分析してい

るが、これらのことは、特に個々の地域性の問題として体系的把握が試みられている。

しかし、本書中で「筆者の関心」、「当面の課題」として示されたことは、単に氏自身の研究姿勢の披瀝と言うよりも、本書の編集に際して同氏が意図した所を示すものであろう。ただし、編著者自身はその個々の論稿についての若干の「解説」を付しているに過ぎず、自らの調査した東北地方各地の死霊結婚について、その地域的特性の把握という観点から論及しているほかは、各論稿の内容にそのまま語らせるか、あるいは読者や今後の研究者にこの作業を託す形をとっている。同氏は、この「解説」の最後で、近年中国民俗学の研究体制が整ったことに触れ、中国における研究の進展に期待を示した上で、「こうした中国をはじめとする周辺各国の研究動向に留意しつつ、各地の死霊結婚の習俗を慎重に分析してゆかねばならない。そして、広く東アジアを視野にいたかたちで、これを把握することが肝要となってくるであろう。」(傍点評者)と述べている。このように、氏は東北地方における自らの研究で課題としたことが、その他の地域でも同様に進展を見ることによって、東アジア総体としての死霊結婚の研究につながることを期待しているのである。

本書は、「東アジアの死霊結婚」というタイトルはついているものの、東アジアにおける死霊結婚の比較研究を積極的に推進するという性格は薄いように思われる。編著者の意図は、むしろ比較研究の問題点や課題を浮き彫りにするところであり、そのために研究史を整理したものとして本書は意義を持つと言える。松崎氏はまた、本書の性格について、「全体的にまとまりは少ないものの、地域毎の特徴に照らして各論者が独自の視点からアプローチを試みており、我々は様々な分析方法を学びとることができるとともに、数多くの論稿を比較することにより、問題の所在が明確になる」と述べており、研究者の視点や分析方法の比較ということにも本書の意義を見出している。

以上のような本書の性格は、編著者の研究姿勢によるところも大きいですが、死霊結婚をめぐる本格

的な研究がまだ緒についたばかりであることも背景にあると言える。その意味では、本書は編著者自身が言うように、東アジア全体を視野に入れた今後の死霊結婚研究への「初めの一歩」なのかも知れない。

最後に、本書の巻末に竹田旦の作成したものに編著者が加筆した、中国・韓国・日本の死霊結婚に関する文献目録が載せられていることも付記しておく。これは、本書中の個々の論稿と併せて、今後の死霊結婚の研究に大いに役立つものと考え

(1993年12月 岩田書院刊 A 5 判576頁)

アラン・ダンデス、他／著  
荒木 博之／編訳

『フォークロアの理論

— 歴史地理的方法を越えて —』

鈴木 寛\*

本書の企画意図について、編者は冒頭の〈序論〉で次のように述べている。「この書はフォークロアとは何か、民間説話 (folktale) とは何かという本質的な問いかけに答えようとする意図をもった論文を中心に編集したものである」と。編集に当たっての視覚は、日本においても既にその業績がひろく知られている歴史地理的方法論、フィンランド学派の方法論に関しては紹介を控え、その後の反フィンランド学派の旗手としてのアラン・ダンデス、並びにフォン＝シドウ、ヘルマン・パウジンガーらの方法論の紹介が主要な目途となっている。内容を概観してみると、以下のとおり、序論ほか8篇の論考から本書は構成されている。

〈序論〉「フォークロアの理論 — 歴史地理的方法を越えて」(荒木博之)

1. アラン・ダンデス

「フォークロアとは何か」(荒木訳)

※筑波大学大学院歴史・人類学研究科